

## これからの学校で 子どもたちは いかにか育つのか

福井県小学校長会

会長 小林 利 幸



NHK朝ドラ再放送が始まる頃になると、給食を終えた子が校長室を訪ねてきます。はじめはどうにも教室で気持ちが落ち着かずに来ていたのですが、最近（原稿を書いているのは11月）は、カルタで坊主めくりをするために、時には友達と一緒にやってきます。運を天に任せるだけの坊主めくりなので、毎回何かのドラマがあり結構楽しめる時間になっています。カルタをめくりながらたわいもない話をしたり、あのときはこんな気持ちだったんだと話してくれたりします。

どの子にも学校の中に居場所があるということはとても大事なことだと思います。本当は校長室ではないところにきちんとした場所があることが望ましいとは思いますが、果たして全ての子どもたちが自分の居場所をもっているのだろうかとき々自問することがあります。

時代は変われども、子どもを真ん中において学校が存在するという事は変わってはいけないのではないのでしょうか。昨年度から今年度は、学校というものの存在意義について、校長先生方をはじめ校内の教職員がいろいろと考え悩んだ年だったと思います。もちろん我々以上に、子どもたちや保護者、地域の大人など、全ての人が学校というものについて考えた年になっていたと思います。

少しずつ以前の日常を取り戻しつつありますが、2年目となった新学習指導要領の下での学びは進んでいるのでしょうか。8月に鯖丹地区で研究大会を開き、提言者の発表をもとに互いの学校の状況を話すことで、夏休み以降の研究をさらに進めていく予定でした。延期にはなりましたが、11月にオンラインでの分科会が実施できました。校長にとっての学びの場は何か最低限確保されたのではないのでしょうか。提案者や司会者、運営担当者の方々には大変お世話になりました。

11月末現在、コロナウイルス感染症は全国的に落

ち着きを見せており、感染者の全国合計が二桁の日もあります。その様な状況の中、全校が集まる集会が開催できたり、子どもたちが楽しみにしている校内体育大会や修学旅行などの行事も何とか実施できたりしています。コロナウイルスが猛威を振っていた頃には、先行きの見えない不安ばかりでしたが、ワクチン接種が進み、医療へのしわ寄せも何とか回避できていることで、安心感を取り戻しつつあります。

しかし、新たな変異株であるオミクロン株が、南アフリカから欧州はじめ世界各地へ拡大しているというニュースも入ってきています。「會報」が出される2月にはどのような状況になっているのでしょうか。学校の教育活動は一体いつまでコロナウイルスに翻弄されるのでしょうか。

先般実施された横浜創英の工藤勇一校長のオンライン研修に参加された校長先生方もいらっしゃると思います。「2030年人類は存在できるかできないかの岐路に立つ。人口爆発、食糧問題、環境問題など、どの問題でも利害対立が起こる。分かりやすい例は、コロナウイルス対策と経済を回すということ。対立・ジレンマを解決するために対話する力が求められる。その時に持続可能な社会を創るという点では一致するだろう。そのための対話をしよう。そんな対話する力をもつ子どもたちが育つことを目指すのが世界の学校教育の目標」とのこと。いろいろなことを考えながら話を聞かせてもらいました。参加された皆さんはいかがだったのでしょうか。私は、手をかければかけるほど子どもたちは自立できなくなると最近よく思います。

最後になりましたが、「會報」の発行に際しご協力いただいた関係各位、並びに編集広報委員の皆様  
に感謝申し上げます。

ありがとうございました。



# 思い出に残る楽しい学校づくりと 読書活動の推進を



福井県教育委員会

教育長 豊北 欽一

福井県小学校長会の皆様には、日頃から本県の教育力向上にご尽力いただきありがとうございます。

校長先生方は、小学校時代どのような思い出が残っていますか。素晴らしい教師に出会い、その頃から教員になりたいと思った方もおられるでしょう。

今年度、「引き出す教育・楽しむ教育推進事業」において、各小学校でテーマを設定して取り組んでいただいています。「子どもの興味・関心を生かす」「ICTの効果的活用」「主体的・対話的な学び」「地域資源を生かした探究的なふるさと学習」などのテーマが数多く見られました。どちらかと言えば、子どもを主体に置くテーマより、教員を主体に置くテーマが多くありました。校長として、教員人生の締めくくりとして、こんな学校をつくりたい、こんな取組で子どもに夢や希望をもってもらいたいと、テーマに沿った具体的な活動を進めていただくことを期待します。

私が卒業した木田小学校での思い出として、6年生のときの「お楽しみ会」と「秋の遠足」があります。今はカリキュラムが詰まっております「お楽しみ会」や「クラブ活動」の時間がとりにくいようですが、ある小学校では、「マイステージ」という、子どもたちが特技を自由に発表し合う場を児童会中心に設けていて、そこで披露される手品・なわとび・コント・こま回し・鉄棒・ピアノなどが好評であると伺っています。私は、クラスの子が順番で出し物をする「お楽しみ会」で、黒板の前にイスを置き、正座して「死神」という落語をやりました。私は当時おとなしく、担任も友達もびっくり。クラス中が笑いの渦に。その落語は、放課後もリクエストで4~5回繰り返されました。担任の先生は保護者懇談会で、母に「家庭で何かあったのですか」と事の始終を話したそうです。父は、日頃から世界文学全集や宮本武蔵など、兄弟のお古の本を私に読め読めとうるさく言う人でしたが、私は友達と用水路でのザリガニ釣りやドッジボールを楽しむ方で、読書は大嫌いでした(大人になって後悔し、息子には毎日絵本を読んで本好きに育てました)。保護者懇談会のひと月ほど後に父が上京した際、頼みもしないのに、神保町の本屋で約900頁の「古典落語全集」を買ってきました。親から与えられた初めての本で、今でも大切に保管してあります。父は落語だったら読むだろうと考えたのでしょう。私は、たまたまNHKの寄席番組を見ておもしろかったのも、それを記憶の限り演じてみただけです。「死神」は古典落語の演目の一つで、初代三遊亭圓朝がグリム童話の第2版に収載された「死神の名付け親」を題材に作りかえた名作落語です。興味がありましたら、ぜひ落語の本をお読みください。

もう一つは、6年生の秋の遠足で、木田小学校から文殊山まで徒歩で往復したことです。何キロも歩いたのは初めてで、思い出に残っています。北陸新幹線が令和6年3月に敦賀まで開業します。文殊山の頂上から新幹線がきれ

いに見えますので、ぜひ福井市内の小学校で6年最後の遠足として実施してみてもいいでしょう。5教科の学習で思い出に残るものはなかなか難しいかもしれませんが、行事や体験学習に工夫を凝らし、良き思い出を残してあげてほしいと思います。卒業アルバムを飾り、教え子との同窓会での思い出話になることを願います。

さて学校図書館は、様々なジャンルの本に囲まれ、教科書にない知識を広げられ、心やすまる居場所として大きな可能性を秘めています。平成15年度に12学級以上の学校すべてに司書教諭の配置が義務付けられ、令和2年度では11学級以下の学校120校のうち75校(約6割)に司書教諭が配置されています。平成26年度から学校司書の配置が自治体の努力義務になりましたが、令和2年度、本県では4割弱の小学校にしか配置されていません。神戸女子大の久野和子准教授いわく、医療的に子どもを支えるのが保健室なら、図書館は「魂の安息を与える居場所」であり、児童は本を読むことで世界を広げ、将来に希望や夢を抱くことができます。11月20日に福井県中学生ビブリオバトル大会を開催し、13名の生徒が参加して予選・本選が行われました。福井市美山中学校では、ビブリオバトルの学級予選を行い、文化祭での本選は、保護者や地域の方々にも質疑や審査に参加していただいたそうです。無料の読書アプリもありますので、ぜひタブレットに取り込み、読書通帳として活用してはいかがでしょうか。また、小学校においてもビブリオバトルを企画し、中学生や高校生対象のビブリオバトル大会の参加者が今後増加していくことを期待します。

福井県立図書館が執筆した「100万回死んだねこ」という覚え違いタイトル集が講談社から出版され、5万部の発行数に達しました。図書館の公式サイトで公開している900点から90点を厳選したものです。朝日新聞の天声人語でも取り上げられ、マスコミから問合せが来ています。図書館の大切な機能であるレファレンスサービスを楽しんでいただく機会となりました。講談社からのお誘いで発行に至りましたが、著作権は、図書館司書の思いを汲んで、講談社から本の寄贈という形をとりました。

退職した校長が、講話集を自費出版する例があります。行事や季節に応じて、自分の体験や偉人の伝記、ふるさとへの想いなどを盛り込みながら児童に伝えた講話を本にまとめたものです。この「会報」には、校長先生が児童に朝礼や行事で心を込めて語った講話が紹介されています。これを出版してはどうかと以前から思っています。児童の心に残る講話は、保護者や地域の方々にも伝わるものです。もし講話集を発行するのでしたら、僭越ながら巻頭を書かせていただきます。

終わりに、校長先生皆様のみまますのご健勝、ご活躍をお祈りいたします。

## 時流潮流

# 持続可能な暮らしと今庄宿の町並み ～次代の担い手とともに学びながら成長するまちづくり～

NPO 法人今庄旅籠塾

理事長 細川 治



今庄宿は福井県のほぼ中央に位置し、山中峠、木ノ芽、栃ノ木峠の三つの峠があり、古来より越の国と京（みやこ）を結ぶ北陸の玄関口として、交通の要衝であり交通の歴史と共に歩んできました。現在の今庄宿は慶長7年（1602年）、福井藩主結城秀康が旧北国街道に宿駅を整備したのが始まりとされ、多くの旅人が行き交う宿場町として繁栄し、中心部には本陣や脇本陣、問屋場等が置かれ、街道沿いには旅籠や茶屋などが軒を連ねていました。その後、明治時代に入ると宿場町としての機能はなくなりますが、明治29年（1896年）に敦賀～森田（福井市）間で鉄道が開通し、今庄は北陸最大の難所である、今庄～敦賀間に挑む鉄道基地として再び繁栄しました。しかし昭和37年（1962年）の北陸トンネルの開通と鉄道の電化などにより、「宿場のまち」「鉄道のまち」として栄えた今庄宿はその役目を終えて、人口減少の著しい過疎のまちへと変わり、これまでの暮らしとともに歴史的な景観が消滅しようとしていました。

豪雪地帯と言われる今庄では、数年に一度は大雪に見舞われ、この地を離れる人が後を絶ちません。こうなると住民の生活にも影響を与え、町並みは一気に衰退します。それでも今庄宿の町並みは以前から専門家を中心に歴史や街道ファンからは高い評価を得ていて、訪れる人は絶えることがありません。しかし現在の町家に暮らす住民にとっては、日常の不便さもありその価値を意識することがありません。



高校生の町並み見学

本陣跡地近くの昭和初期建築の木造寄棟屋根洋館や、2階窓に手すりを配した特徴的な旅館も壊され、もう猶予はありません。さらには今庄宿のシンボリックな旅籠若

狭屋の解体の噂を聞き、有志によって保存活動がようやくスタートしました。現在のNPO法人今庄旅籠塾の設立は、町並み保存のラストチャンスだったように思います。私たちの活動は「今庄宿の町並み保存」と「地域の暮らしの向上と持続」が中心です。最初に取り掛かった若狭屋の保存では、活用案を当時勤務していた県内の工業高校の建築科生徒たちと一緒に考えることからスタートしました。生徒たちは見慣れない町並みや町家の特徴を見学しながら、若狭屋にふさわしい改修案を1学期間かけてまとめました。予算のない中での改修は材料だけは確保しますが、ここでも県内の高校生の手を借りながら改修を始めました。学校としても授業ではできない貴重な体験や将来の職業選択の機会となりました。建築分野だけでなく、デザインや染織、歴史、観光など多方面に広がり、今では毎年の夏休みを利用して多くの高校生や大学生、社会人が集うようになりました。学生たちは今庄の町家の改修を通して、自分の住む地域にも目を向けるようになったと言います。まちづくりの気持ちがこうして次の世代にも少しずつ引き継がれ今年で13年目を迎えました。



若狭屋の改修

空き家の解体話があれば、できるだけ残すよう話をさせてもらい、次の活用について一緒に考えます。地元の大工棟梁によって生み出した、太い登り梁で支えた深い軒に袖壁、出格子は今庄の風土に合わせて築かれました。これらの重厚な町家が続く家並みは大変貴重な財産であり、壊してしまえば二度と再生はできません。持ち主から借り受けた建物は、調査から始まり改修設計を行います。いざ改修となれば当然資金不足なので、材料費

の確保はしても、手間は会員の持ち出しで埋め合わせ、何より学生たちの労力が貴重な助けとなります。

最初に手掛けた旧旅籠若狭屋は、普段はNPO法人今庄旅籠塾の事務所として利用するほか、「十割そば六助」として営業をしています。築200年の旅籠にはジャズが流れこだわりの手打ち十割そばは人気があります。店主のそばへのこだわりはもちろんですが、町並みや歴史、文化を大切にしておもてなしをしています。土日を中心にした演芸会やコンサート、研修会や講演会では、多くの人が集まり宿場の賑わいを取り戻しました。

次に取り組んだのは昭和初期に建てられた今庄の典型的な一般住宅の旧山田家です。街道から少し入ったところにあり隠れ家的な古民家カフェです。改修は最小限にとどめ、カマドやナガシはそのまま残して客席からも見えるようにしました。昭和にタイムスリップしたような落ち着いた空間になりました。当初は「Coffee&Bread 木ノ芽」カフェを営業し、手作りの日替わりパンが人気で遠くからのお客さんが多く見えました。現在は「ふわふわパンKINOME」として独立し、今庄宿の賑わいに貢献しています。引き続き旧山田家には、素材にこだわった白玉団子スイーツのカフェ「甘味処てまり」がオープンし連日大勢のお客さんで賑わっています。



暮らしや（大黒屋）

改修の第三弾は、江戸時代には旅籠として、明治から昭和にかけて駄弁屋の老舗として知られている大黒屋の主屋をお借りしました。明治天皇行幸の際には大隈重信が宿泊し、山本周五郎の長編小説「虚空遍歴」に大黒屋が実名で登場するなど、今庄の歴史を象徴する貴重な建物です。ここ数年で近所の八百屋が高齢化により、3軒とも店を閉じて困っていることもあり、地域の台所を担う八百屋としての大黒屋復活を掲げ改修に取り組みました。屋根と外壁の改修には補助金を充て高野商店様の協力も得ました。しかし内部の改修に予算はなく旅籠塾のメンバーと学生の協力で1年がかりの手作りで進めました。改修作業には高校生や大学生、社会人が進んで参加し、福井大学と交流のある台湾の大学生や先生方の協力もありました。現在は地元野菜の販売やお惣菜、日用品

や駄菓子のお店として、コーナーには高野商店の歴史を紹介し、「暮らしや」として地域を支えています。

私たちの活動の後押しとして、旅籠塾設立から5年後に国の今庄宿プロジェクト事業が採択され町と住民で協議しながら、道路と路地の高質化や街灯・看板など、ハード面での整備ができたことは町並み保存の大きな追い風となりました。それ以降、私たちが目指した「今庄宿の町並み保存」は少しずつ住民に理解され広がり始めてきました。プラスチックの看板や庇が、木の格子やのれんに変わり、エアコンの室外機も目立たなくなってきました。外壁のトタンを板張りにしたり、庭先に花を飾ったりと落ち着いた雰囲気が出てきました。また「地域の暮らしの向上と持続」は、観光目的ではなく住民の暮らし向上が第一と考えています。若狭屋には「十割そば」があり、そばの食文化を伝承し、大黒屋の「暮らしや」で地域の日常生活を支え、旧山田家の「甘味処てまり」は昭和時代を回顧する古民家カフェとして、多くの人が集う場所に生まれ変わりました。

令和3年8月2日、今庄宿が国の重要伝統的建造物群保存地区（重伝建）に選定されると官報で告示されました。県内では若狭町の熊川宿、小浜市の西組地区に続いて3例目で、嶺北では初めての選定となりました。江戸時代に宿場町として栄えた地区で、昔ながらの地割りが残り、重厚感のある町家が立ち並ぶ歴史的な町並みが評価されました。大野市や勝山市、三国町や越前市など、嶺北には伝統的な町並みが残る中で、今庄宿が選ばれたことは嬉しく思います。旅籠塾結成当初は思いもしなかったことであり、使命感に燃えていたというよりも、この景観を何とか残そうとみんなで知恵を出し、汗をかきながらも楽しんで続けてきました。

今庄の伝統的な町家を代々に渡り、造り続けた大工棟梁の島崎文四郎氏、私財を投じて昭和会館や清心閣、明治殿を建設した田中和吉氏などの功績から学ぶことが多くあります。今庄を築いた先人の功績や鉄道遺産を多くの人に発信することが町の魅力向上につながると思います。住民一人一人が地域の歴史や文化に誇りをもって暮らし続けることが大切だと思います。



賑わいをつくる高校生

## 退職校長の言葉

## 定年退職を迎えるに当たって

福井市和田小学校長  
五十嵐 隆美

「人間万事塞翁が馬」私の一番好きな言葉です。「公務員なんて平凡な仕事には就きたくない」と、将来の進路で悩んでいた時に、高校3年生の担任から言われた言葉です。また「平凡なことほど非凡なことはない」と諭されました。そういったことがあり、教職の道を目指すことになりました。

この諺には「どんなに悪いことがあってもよくよしない。そして、良いことがあっても油断してはいけない」「人生において何が良くて何が悪いかは、後になってみないと分からない」といった二つの意味があります。当時は、この言葉の意味をあまり深く考えませんでした。定年退職を迎える今、改めて、この30数年間を振り返りこの言葉の意味を考えています。

教員としての最初の勤務は小学校、当然、授業は上手くできず試行錯誤の毎日でした。今振り返ると、子どもたちに申し訳なかったと思います。しかし、最初に担任した彼らも、立派な大人になり、なぜか今でも声をかけてくれることをありがたく思います。

2校目の小学校では、ハンドボールクラブを立ち上げ、子どもたちの頑張りでもう全国大会にも出場できました。

平成23年から、教育委員会で働くこととなりました。学校現場とは全く異なり、4月当初は、帰宅が0時を過ぎ、「もしかしたらこの仕事は自分にはできない」と自信をなくしました。しかし、2年目、3年目になると仕事にも慣れ、何より市役所の行政職員の方々と関わることで視野が広がり、行政での3年間の経験は、管理職をする上で大きな財産となりました。

あっという間の30数年間、恩師のような公平で温かい教員を目指し、私なりに一生懸命取り組んできました。そして、そこには多くの出会いがあり、子どもや保護者、地域の方々に支えられて勤め上げることができました。特に管理職になってからは、人として尊敬・信頼されたいといった思いで教職員に接してきました。

まさに、「人間万事塞翁が馬」、良いことも悪いこともありましたが、悔いのない教員生活でした。人生において一つの区切りを迎えますが、これからも前向きに頑張っていきたいと思います。

最後に、たくさんの校長先生方にご支援ご協力を賜りましたことにお礼申し上げます。また、皆様方のご多幸・ご活躍をお祈り申し上げます。

## 子どもに教えられて

福井市清水東小学校長  
高澤 輝美

校長としての最後の年を控えたちょうど1年前、学校に1通の手紙が届きました。10年前に担任をした教え子からです。読んでみると、教員採用試験に合格し、春から小学校で勤務するとの嬉しい知らせでした。手紙には、「先生は、自信がもてなかった私を何度も励まし勇気づけてくれました」「突拍子もない発言でも、一つの意見として受け止め、授業の中で丁寧に拾っていただいたことを覚えています」と書かれていました。本当に私はそれができていたのか。全ての子どもたちに…。改めて自分に問い直しました。悔やまれることも頭に浮かんできます。そして、教師としての責任の重さを今更ながら実感したのでした。その手紙に背中を押され、初心にかえる気持ちでこの1年間、校長という立場で全校の子どもたちを見つめてきました。

振り返れば、「子どもに教える」より、「子どもから教えられた」教師生活でした。発達障害と知的障害を併せもったAちゃんを1年で担任した時のことです。急に泣き出したAちゃんを前にして途方に暮れる私に、同じ幼稚園から来た女の子が、「Aちゃんは、あの風鈴の音が怖いんじゃないのかな」と言いました。図工で作った子どもたちのかわいらしい風鈴が、それぞれ涼やかな音を響かせていました。それを順番に外していき、最後の一つを外した途端、Aちゃんはにっこり笑ったのです。人を理解するのに必要なのは言葉だけではない。大事なのは寄り添い続ける気持ちだと教えられました。

また、5年を担任して、道徳の時間に世界の子どもたちの厳しい現状を題材にした時のことです。その日の自主学習ノートに「私たちでできることをしたい」と思いを書いてきた子がいました。学活の時間に子どもたちで話し合い、「募金を集めよう」「使わなくなった服を集めて送ろう」「それは送料がかかるよ」「エコキャップ推進運動というのがあるんだよ。環境を考えることにもなるんだ」などの意見から、キャップを集める活動をするようになったのです。それは地区を巻き込んだ大きな活動になりました。授業の終末がゴールではなく、良いと思うことは工夫して実現させていくことが学びなんだと教えられました。

挨拶の素晴らしさは、今の学校の子どもたちから教えられました。相手と関わろうという気持ちの第一歩が挨拶なんだと実感しました。

コロナ禍の中、様々な対応を迫られる毎日ですが「子どもにとって在るべき学校の姿」という視点で考え、学校の先生方、校長会の先生方で協力し、知恵を絞れば、答えは少しずつ見えてくるのではないかと思います。先生方のご健康と今後のご活躍をお祈りいたします。

## 多くの方々に支えていただいた教職生活

永平寺町上志比小学校長  
南部 充洋

バブル経済が始まる少し前の1985年に新採用で越前町の四ヶ浦小に赴任して、今年度末に母校で定年を迎えることになりました。この37年間で世の中は、大きく変わりました。当時の流行語とともに教職生活を振り返ってみました。

「イッキ! イッキ!」が流行語となった新採用の年は、四ヶ浦小も全学年2クラスずつあり、学年主任の先生に相談したり、指導法をまねたりして多くのことを学びました。放課後、職員同士でスポーツをしたり、食事に行ったり、今では考えられないぐらい、ゆったりと時間が流れていました。

「セクシャルハラスメント」が流行語となった1989年に母校の上志比小に異動になりました。この頃の上志比小も全学年2クラスあり、7年間で全ての学年を担当させていただきました。子どもの発達段階に応じた接し方の難しさを感じました。単学級だったら初めての学年を担当することはなかったかもしれません。

長嶋監督の「メークドラマ」が流行語となった1996年に、合併前の上志比村で派遣社会教育主事をさせていただき、社会教育に携わりました。学校とは違って、同時進行でいくつもの仕事をこなしたり、課員が一人休んでも他の課員で対応できるように、お互いの仕事を理解したりすることの大切さを学びました。

松坂大輔の「リベンジ」が流行語となった1999年には大規模校の福井市森田小へ異動しました。この時の先生方とは今でも飲み会を続けています。

「マニフェスト」が流行語となった2003年には、永平寺町吉野小に異動となり、体育主任、生徒指導主事、教務主任など多くの校務分掌を経験させていただきました。「ゲゲゲの〜」が流行語大賞となった2010年には松岡小へ異動し、体育館や校舎の新築や改修の中での学校生活も体験しました。

「じぇじぇじぇ」や「お・も・て・な・し」が流行語となった2013年には、上志比中に異動しました。50歳を過ぎてから初めての中学校勤務でしたが、思いの他快適に過ごすことができました。

「インスタ映え」が流行語となった2017年には教頭として大野市阪谷小へ異動となりました。初めての大学勤務でしたが、他校の教頭先生方に助けていただいて、何とか2年間過ごすことができました。大雪の年もありましたが、さすが奥越です。除雪が素晴らしかったです。市役所駐車場の雪山は圧巻でした。

「ワンチーム」が流行語となった2019年に上志比小に異動となりました。これまで多くの人々に支えられてここまでやってこれたことを深く感謝しています。

## いろいろな出会いに感謝

大野市小山小学校長  
大廣 憲治

振り返ればあっという間の38年間の教職人生でしたが、いろいろな思い出が走馬灯のように蘇ります。

新卒の数年間、毎日が明日の授業をどうするか、児童に満足と喜びを与える授業がどうすればできるかと悩んでいました。それから数年後、書店の教育書コーナーに並び始めた向山洋一氏の「授業の腕を上げる法則シリーズ」の本に惹かれ、貪るように読み、自分のアイデアも織り交ぜながら実践していきました。子どもが喜んで授業に取り組む場面が次第に増えていきました。また、セミナーに参加し、全国の教員仲間との交流も刺激になりました。懇親会の二次会で向山氏に声をかけられ、囲碁の対局までしていただいたことは忘れられない思い出の一コマです。

新卒の3年間を経て地元の小規模校に赴任しました。地元で一番古い木造校舎で、運動場は1周が100m程の小さな校庭と講堂だけでした。ある日、図書室の片隅にあった斉藤喜博氏の著作全集と出会い、毎日深夜まで読み耽り、氏の教育愛、教育実践に時空を超えて感激したものです。まだワープロが出始めた頃で毎日がゆったりとした時間の中、子どもとのふれあいや授業を楽しみました。

担任していたクラスの中に不登校気味のK君がいました。当時は「不登校」と言わず「登校拒否」と言っていました。特にこれといった解決策も見いだせず、原因も分からないまま月日が流れ、K君は卒業していきました。その後縁あって2年間、兵庫教育大学大学院に内地留学させていただきました。教職を保ったまま院生として過ごし、全国の教員仲間と交流できたことはとても貴重な経験でした。修士論文のテーマは「登校拒否と自己実現」とし、不登校児童生徒の回復に向けた心理的変容について研究しました。幸い大学図書館は夜の10時まで開いており、研究には最適な環境でした。図書館を出て一息つき、ふと仰いだ満天の星空を今でも思い出します。

2年後、元の学校に戻った私は、新たに不登校のM君と出会い、今度は解決に向けての道を共に歩むことができました。

多くの出会いがこの後も訪れますが、紙面が尽きてきました。その後、中学校での勤務を経て、県の巡回カウンセラーとしての勤務や教育研究所教育相談課での勤務など、今から思えばどれもこれも貴重な経験をさせていただきました。管理職の仕事に就いてからも、若い頃に培った授業で勝負する心意気と一人一人に寄り添う心に立ち返りながら今日まで歩み続けることができました。

未熟な私を陰に陽に育ててくださった諸先輩方をはじめ、気付かないところでお世話いただいた全ての方に感謝して私の教職人生を終えたいと思います。

## 出会いとつながりに感謝…

坂井市立東十郷小学校長  
塩谷 伸恵

これまで、とても多くの皆さんと出会い、つながりをもってきました。児童生徒、保護者、地域の皆さん、外部機関の皆さん、諸先輩、そして共に力を合わせて仕事を進めてきた教職員の皆さん、皆さんのおかげで今の私があると、感謝の気持ちでいっぱいです。

無我夢中で過ごした二十代、いろいろなことに挑戦させていただいた三十代、様々な立場を経験させていただいた四十代、管理職としての五十代…いつもわくわくした楽しい毎日でした。もちろん、辛いことや苦勞したこともありましたが、辛い時こそ笑顔で、次はどんな作戦でいこうかと考えることに面白さを感じました。そして、子どもたちのきらきらした笑顔や成長している姿を見て、大きな喜びを感じ、だからこの仕事は楽しいのだとやりがいを感じながら過ごしてきました。

最後の2年間は、コロナ禍での日々でした。3か月の臨時休業中に異動になり、前任校では十分な挨拶ができなまま、現任校でも子どもたちに2か月間会えないままでした(元気をくれたのは、玄関前の花壇のチューリップでした)。コロナ禍での教育活動をどう進めるかが当初の最大の課題だったのですが、災い転じて福となす、教職員が心をつなげて取り組めたこと、この機会に何が大切かをみんなでよく考えて実行できたことが何よりでした。奇しくも新学習指導要領の完全実施の時と重なり、「主体的・対話的で深い学び」は、児童だけではなく教職員にとっても目指す姿になりました。様々なアイデアを出し合いながら、いつも前向きに取り組む教職員の様子を見て、私もこの集団の一員でいるということに喜びと誇りを感じました。

先日、6年生の教室で、「去年は調理実習ができなくて残念だったね。ようやく少しずつできるようになったね」と話した時、「残念ではないです。心に残る記念すべき学年ですから」という言葉が返ってきました。

「できない」ことを考えるのではなく、「何ができるか」「どうすればできるか」「子どもたちにとってどうか」「何のために行うのか」を考えながら進めてきたことは、子どもたちにとっても教職員にとってもプラスに働いていると実感しています。

そんな子どもたちや教職員、そして、今まで出会ってきた多くの皆さんのことを思う時、やはり「人っていいなあ」「つながるっていいなあ」と感じずにはられません。これからも人との出会いやつながりを大切にして、自分らしく歩いていきたいと思っています。

皆さん、本当にありがとうございました。

## 楽しい、ありがたい日々でした

鯖江市惜陰小学校長  
窪田 光世

59豪雪直後の春、赴任したのは雪にすっぽりと包まれた山の学校でした。グラウンドには中学生の背丈ほどの雪があり、マウンドからホームまでを細長く掘って野球の練習をしていた二人の少年たちを含めた中学3年生44名が、私が初めて担任する生徒でした。

「先生」というより「姉」といった感覚でまっすぐにぶつかってくる、思春期の多感な子どもたちとの楽しい(悪戦苦闘しながらの)日々。何もかもが初めての私を、「先生、好きなようにやってちょうだい」と温かく見守ってくださった保護者や町の人々と、美しい自然に囲まれ、まさに小説やドラマの世界でした。

経験のない若い教員に中3を任せるということは、つまずいたり転んだり、そこに周りを巻き込んだりすることが前提の、覚悟と温かく大きな包容力、若い教員を育てていく土壌や体制があつてのことです。校長先生をはじめいつも支えてくださった教職員(町内の他校の先生方も)の皆様には感謝しかありません。

もちろん当時の中学校が直面していた課題は全て存在していましたし、研究発表会での授業公開や、地域と連携したふるさと教育、役割分担して子どもたちを育てていくことなど、そこで過ごした4年間には、今思えば、その後の教員生活に起きたあらゆることの「種」のような貴重な経験が散りばめられていました。

そして何より、子どもの成長や教育のもつ可能性を心から実感できたことは、その後の教員生活の支えとなりました。子どもはどんな時でもどんなものからも学ぼうとしている。あらゆる方向に伸びようとしている。そこに大人が(たとえ新米の私の手であっても)関わることでそれを助けることができるということ、教員生活のスタートで実感させてもらえたことは本当にありがたかったと思います。

どこの県でも教職志望者が減っていると言います。教職に魅力がないとか、ブラックだとか言われます。若手教員や学校に関わってくれる学生たちに、教職の楽しさ、子どもの伸びようとする力、それに関われる喜びを感じてほしいと願ってきました。私が経験させてもらったように、たくさんの「種」を蒔いておきたいと思ってきました。かつて私の周りにいてくださったたくさんの方々程のことができたとは、到底思いませんが、38年間の教員生活を終えるに当たり、これから立場は変わりますが、若い方たちが希望をもって教職を目指し、また、楽しく子どもたちに関わっていただけるように、応援していきたいと思っています。私に関わってくれた子どもたちを含め、私を育ててくださった皆様への恩返しとして。

## 出会いに恵まれて

越前市武生南小学校長  
清水 誠

半世紀を隔てた後輩たちの日々の成長に目を細めながら教職の締めくくりができる巡り合わせに感謝しています。地元では中学校勤務が続き、小学校は母校武生南小での管理職としての4年間だけの関わりだったのですが、初任校は旧坂井郡芦原町の小学校でした。

昭和59年春、新郷小学校に着任した私は、真新しい校舎を前にして足がすくみました。高校で教科を教えるつもりで採用試験を受けましたので、小学生を指導するための知識も技術も乏しいことを自覚していたからです。12名の3年生の担任となり、自分が小学生の時に映画鑑賞で観た「二十四の瞳」のようにとイメージしたりもしましたが、一コマの授業準備にも悪戦苦闘し、最初の学期はまとまった睡眠がとれない毎日でした。そんな私が長く教員を続けることができたのは、各学校で出会った先輩・同僚の先生方の教えと支えがあったからです。

尊敬する先輩は初任者を前に「教員は初任校で決まる」が口癖でした。いや、そうとは言い切れないでしょうと心の中では思っていました。自らの歩みを振り返ると私の場合は新郷小での経験が、教育観や教師観の核となっていることに気がきます。拙稿では、校長との関わりで特に印象に残ることを書かせていただきます。

3年目のある日、児童とバドミントンをしていた時に羽根が子どもの目の近くに当たりました。念のため帰宅後に受診してもらうという判断になったのですが、夕方の保護者からの電話で私は真っ青になりました。失明の危険があり大きな病院で手術の必要があるかもしれないと言われたそうです。すぐに校長に報告すると、「学校では事故は起こる。教頭と私で全部対応するから心配しないように」と即答されました。翌日に回復の連絡があり安堵したのですが、それまで恐る恐る接してきた上司への信頼は揺るぎないものになりました。

パソコン教育を推進し、業者プリントの利用を非難する型破りな校長でした。当初の職員の反発は想定内だったのでしょう。翌年にNHK学校放送の取材がありました。校長発案で筏作りがテーマです。その頃には職員もやる気満々で、最後に竹田川で船遊びの計画が出ました。ストップをかけたのは校長です。プールに浮かべた時も児童が転落したら自分が飛び込む準備をしていた。川はあり得ないと。慎重な先生方が揃っていても集団心理で流されることがあります。豪放にして細心な方でした。

学校で生かせる特技がなく、人前で話すことも苦手な私ですので、教員が天職であったとはとても言えません。しかし、学校での出会いに恵まれ素晴らしい年月を過ごすことができたという確信はあります。最後まで誠実に着実に自分の務めと役割を果たしていきま

## 感佩の気持ちを込めて

若狭町立野木小学校長  
赤城 俊彦

校庭のプラタナスは黄金色となり、裏山の木々は色とりどりの錦紅葉の時期を迎えています。少しずつ寒さを感じるようになった霜月。寒さに負けず子どもたちは元気いっぱい「おはようございます」と登校してきます。子どもの登校を玄関で迎える毎日。子どもたちからのエネルギーをもらって1日が始まります。

大学が東京だったのでお隣の千葉県で中学校新採用教員となりました。毎日起こる生徒指導事案に追われ、バレー部の指導では朝練、放課後、夜練、土日なしの練習に明け暮れる毎日。当時は校内暴力の嵐が吹き荒れ、テレビでは「24時間戦えますか?」というCMが流れていた時代です。その後、福井県に戻り高校に勤務して、大学進学指導で教材づくりと教材研究の毎日。専門教科が英語なので長文読解や文法問題と睨めっこ。大学入試問題では四苦八苦。そして地元の中学校、小学校への異動となり、子どもたちと共に学び、地域や保護者に支えられながら多くの学校行事、体験活動を行うことができました。

これまでの教職に就いていた約40年間を振り返ると、あらゆる物がものすごいスピードで変化していたことに改めて気付きます。例えば印刷・製本については、新任の頃は、「ボールペン原紙ホワイトミリア」を使って原稿を作っていました。英語のテストは手書きか英文タイプライターで作成。その後、製版技術は進化して、二つの円筒がカタカタと10分程回り原紙が完成するという謄写ファックス装置謄写製版機が活躍。しかし、印刷では原紙のローラー貼り付けと廃棄、インク調節は全部手動。インクのムラや目詰まりが頻繁で、印刷は手が汚れる「汚れ仕事」そのものでした。やがて年賀状印刷に「プリントゴッコ」が登場してからは、自動製版印刷機が学校に配備され印刷業務がスムーズになりました。現在はボタン一つで手を汚さず製版印刷が完了する印刷機が配備されています。これから、印刷の仕事をはじめとする学校の仕事はどのように進化していくのでしょうか? ICTに疎い私には想像もつきません。

しかし、社会がどのように進化しようとも、これまで大切にしてきた学校の役割は変わりません。それは、子どもの「これまで」を理解し「これから」を応援していくことだと思っています。その子の人生がより良いものになるように、そして、社会がより良くなるように応援することが教師の大きな仕事であると思っています。これまでこのような大きな、そして、やりがいのある仕事に関わることができて本当に幸せであったと思います。楽しかったこと、辛かったこと、感動したことなど、たくさんの思い出が頭いっぱい、胸いっぱい。永年に渡り支えてくださった先輩、後輩、地域の方々、仲間たち、保護者の皆さん、家族などなど…そして出会った何千人もの子どもたちにも感謝・感謝・感謝。

すでに落葉してしまった桜樹の葉々たち。その枝々をよく見てみると、たくさんの越冬芽が出ています。冬の寒さに耐え春を迎え暖かくなると、芽はだんだんと大きくなりやがて満開の花へと。4月には暖かな風の吹く中、満開の桜花をくぐり笑顔いっぱいの新1年生の入学。そして、新入生に優しく話しかける先生方。そんな新しい学年の始まりを、温かく応援したいと思います。



## 校 長 講 話

## ふるさとを知り、ふるさとを大切にす

永平寺町御陵小学校長  
竹内 康高

今年度になって初めてこの体育館で、御陵っ子みんなの校歌の歌声を聞きました。久しぶりに聞く皆さんの歌声はとても素晴らしいものでした。これからも自分たちの校歌を大切に歌ってほしいと思います。

さて、この校歌の歌詞の中にある「五領が島(ごりょうがしま)」というのはどこの地名か知っていますか？昔、御陵地区には「五領が島村」という村があったそうです。現在の上合月、下合月、末政、兼定島、渡新田を指しています。そこに、明治22年に、領家、樋爪が山林とともに編入され、御陵地区となったそうです。その山林が当時の学校林として、給食調理や暖房用の燃料となる薪の調達先として貴重なものとなったそうです。皆さんの先輩たちは、学校林まで薪を取りに徒歩で行ったそうです。その後、ガスが普及するとともに、学校林は次第に使われなくなり、荒れていましたが、約10年前に「七福産業振興会」の方々が再整備を行い、御陵っ子による桜の植樹活動が始まりました。昨日、6年生が「七福産業振興会」の方々と一緒に学校林に行き、平安しだれ桜を5本植樹してきました。この御陵小学校にも学校林があることを知っておいてほしいと思います。



また、地域に関わる活動として、3年前から4年生による御陵きらきら探検隊という活動を行っています。(知っている人は手を挙げて)これは、永平寺町の社会福祉協議会と一緒に取り組む活動で、みんなが住んでいるこの御陵地区にあるきらきら(地域の宝)を発見することを目的としています。1年目は、地域で活躍している人(車椅子バスケットボール選手、下合月サロンの高齢者)との交流、2年目は、視覚障がいの方との交流を通して、障がいについて考えたり、車椅子によって学校周辺の道路状況を確認したり、御陵医療施設のバリアフリーを体験したりしました。3年目の今年は、「御陵の人を知る～人とのふれあい～」をテーマにして、末政ファーム、下合月集落センターや御陵地区の神社に向いて、地域の物知りさんとの交流を行う予定です。どんなきらきらが見つかるか楽しみにしてください。いろいろな活動の中で、御陵っ子の皆さんが住んでいるこの御陵地区について、多くの人から学び、その学びを御陵っ子全体に広げる活動を通して、「ふるさとを知り、ふるさとを大切にす御陵っ子」になってほしいと思います。



## 「いただきます」「ごちそうさま」

勝山市立平泉寺小学校長  
道関 実代子

朝晩、ずいぶん涼しくなり秋の深まりを感じるようになってきました。秋という季節は、「○○の秋」と言われる言葉がたくさんあります。例えば、「読書の秋」「スポーツの秋」「芸術の秋」「実りの秋」「食欲の秋」などが挙げられます。校長先生は、とても食いしん坊なので「食欲の秋」という言葉がすぐ思い浮かびました。

ところで皆さんは、今朝は朝ご飯を食べてきましたか？ごはんを食べるときに、「いただきます」や「ごちそうさま」を必ず言っていますか。では、「いただきます」や「ごちそうさま」の意味を知っていますか。今日は、そのことについてお話しします。

私たちは生きるために、何かを食べなくてはなりません。その何かは野菜であったり、お肉や魚であったりしますが、それらにも命があります。「いただきます」は「それらの命を私の命にいただきます」という感謝の気持ちが込められています。また、料理を作ってくださった方、野菜を育ててくださった方、魚をとってくださった方など、食べ物が口に届くまで関わった全ての方々への感謝の意味も込められています。

「ごちそうさま」は漢字で書くと「御馳走様」と書きます。ちょっと難しい漢字ですが、「馳走」という字は「走り回る」「ほんそうする」という意味です。昔は、今のように食材がお店で簡単に手に入らず、いろんなものをそろえることは大変なことでした。そのため、お客様に食事を出すために馬を走らせたり、自分で狩りをしたり、走り回ったりして準備をしたそうです。その様子から「馳走」という言葉には「もてなし」の意味が含まれるようになり、さらに丁寧語の「ご」を付けて「御馳走」というぜいたくで豪華な料理を指すようになりました。そして、そこまでして食事を用意してくれた方への感謝の気持ちを込めて「ごちそうさま」と挨拶するようになりました。

「いただきます」や「ごちそうさま」という言葉は、他の国の言葉にはぴったりと同じように意味する言葉はないそうです。日本独自の文化なのです。

食事を粗末にするということは、命や人の思いを粗末にするということです。ふだんは何気なく言っている「いただきます」「ごちそうさま」の意味をきちんと理解して挨拶することで、心の栄養にもつながるのではと思います。皆さんもこれから「いただきます」「ごちそうさま」を大事にして食事をいただきましょう。

## 旧門の教え(旧門に刻まれた加戸小の不易)から

坂井市立加戸小学校長  
齋藤 実紀夫

旧門の教えー有書不讀子孫愚 有田不耕倉廩虚ー  
「白楽天勸学文」より

1学期の間、「笑顔でおはよう、元気にまた明日」を毎日続けることはできましたか。できない日もあったけれど、大体できたという人が多いかな。毎日できることにこしたことはないですが、安心してください。「今日は明日は」と思うことが少しでもあれば、きっと成長した自分を発見できます。



(スライドショーで成長の跡を振り返り)

ところで、覚えていますか。(白居易の肖像画を見せて)白居易(白楽天)さんです。前の朝会では「旧門の教えの意味は分かっていますか」と皆さんに聞いたところで「つづく」になりましたね。白居易さんが書いたこの6行の詩(白楽天勸学文を見せながら)の意味「田んぼがあっても、ほったらかしておくと、食べ物が無くなって生きていけなくなってしまう、書物があっても教えなければ、知恵や心が貧しくなって安心して毎日を暮らすことができなくなってしまう。そうならないように、親は働くことや学ぶことの大切さをしっかりと子どもたちに教えなさい」となります。「んっ」と思った人、いるんじゃないかな。元々の詩は、先生たちやお父さんやお母さんたちに向けての言葉なんです。さらに、気付いた人いますか。皆さんが、いつも暗唱している旧門の教えと違うところが二つあります。「田有れども」と「書有れども」の行の順番が逆になっています。もう一つは「読」が「教」になっています。ということですから「書物があっても読まなければ、知恵や心が貧しくなって安心して毎日を暮らすことができなくなってしまう。そうならないように、あなたたちは、しっかりと学び働きましょう」となります。

さて、いよいよ明日から夏休みですね。夏休みのいいところは、宿題もあるけれど、自分が勉強してみたいことを深く、どれだけでも深く追究できる時間があること、自分がやってみたい家での仕事やお手伝いをいっぱいさせてもらえることです。何となく毎日を過ごすのは、旧門の教えにあるように愚かで虚しいです。やりたいことやできるようになりたいこと、楽しめることを思い描いて、夏休みを「元気におはよう、笑顔でおやすみ」と言える日々にししましょう。

## シトラスリボン運動

美浜町立美浜中央小学校長  
塚原 仁朗

おはようございます。あと2週間ほどで、夏休みに入ります。楽しみですね。でも新型コロナウイルスは、まだ、終わっていません。このウイルスには三つの感染があるというお話は前にしましたが覚えていますか。ウイルスの感染、不安の感染、そして差別の感染です。今日は特に、差別の感染についてのお話をします。さて、ここに大きな紙が貼ってあります。「ただいま おかえりって 言いあえるまちに」「みんなで広げよう、シトラスリボンプロジェクト」と書いてあります。このプロジェクトの意味を説明します。今も世界中の多くの人々を苦しめている新型コロナウイルスですが、この福井県でもたくさんの方が感染し、辛い思いをしています。実は、病気で熱が出たり、咳が出たりということでも苦しむだけではないのです。感染した人ということで、差別をされて苦しむ人たちが多くいるのです。病気になりたくてなる人はいません。気を付けていたのに感染してしまうのがこの「新型コロナウイルス」の怖いところです。それなのに、まるで悪いことをした人のように「こっちに來てはダメ」とか「あの人はコロナに感染した人」とか言われて、嫌な思いをする人たちが多くいるそうです。そこで、そんな差別は「しない、許さない」という運動が愛媛県で始まりました。もし、感染してしまっても、ちゃんと治療を受けて、治ったら、「ただいま」「おかえり」と笑顔で迎え合うことができる、あたたかい町にしていきたいという願いがあります。その運動のシンボルマークが「シトラスリボン」です。この三つの輪には、「地域・家庭・学校(職場)」で差別はしませんという意味があります。(途中略)

この美浜町は「人権を守るまち」として、決して差別を許さないことを大切にしてきた町です。ですから、このシトラスリボン運動にも積極的に参加しています。そして、皆さんもこのリボンを付けて、「コロナの差別はしません」という気持ちをもってもらいたいです。もちろん先生方も同じです。このリボンを作るのに、物作りクラブの人たちなど、多くの方が手伝ってくれました。ありがとう。あとで、教室で配ってもらいます。今日は、コロナでも差別をしないという「シトラスリボン」についてのお話でした。



## 令和3年度 専門委員会活動報告

## 人事行財政対策委員会

本委員会では、主に二つの活動を行った。一つは「県教育長と語る会」に向けて、二つのテーマについて各地区校長会からの県教委への意見・要望等を集約し、懇談会の話題として取りまとめた。もう一つは、全連小三地区対策担当者連絡協議会に向けて、福井県の現状を集約し報告した。コロナ禍の中、本年度は遠隔で参加した。

## 1 県教育長と語る会 9/22(水)

当初は8月26日(木)の予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大による県緊急事態宣言中であったため、9月22日(水)に規模を縮小して実施した。県教委より豊北教育長をはじめ6名、県小中学校長会より9名が出席した。次の二つのテーマについて、校長会より話題を提供し、学校の現状や課題等についてご理解をいただいた。

## (1) 本県の教育を向上させるための取組(ICT)

## ○鯖江市のGIGAスクール構想の取組

R2~3年度の取組として、業者によるiPad研修やIT支援、ロイノート研修、持ち帰り実施、指導主事訪問時のICT活用等を行ってきた。

課題として、各校の教育目標や研究主題に沿った効果的な活用方法の研究や個別化された学びへの活用、情報モラル教育の推進、オンラインでのアンケート、配付物のデジタル化等が挙げられる。

## ○小学校の取組

いつでもどこでも利用可能な環境を提供するために、主体的に深く学び合うためのツールや効果的な子どもの評価、授業改善への可能性を高めたい。

課題として、有効活用方法についての情報共有や端末の管理、運用、メンテナンス等が挙げられる。

## (2) 働き方改革

## ○敦賀市の取組

行事の削減や内容、日課表の見直し、退勤時刻の管理とノー残業デーの実施、留守番電話の導入、学校運営支援員の活用、県P連・市P連からの協力依頼の文書配付等に取り組んできた。

課題として、タブレットを活用してのスケジュール管理や市内会議のオンライン化、気がかりな児童への対応増加、学校現場での「手詰まり感」等が挙げられる。

## 2 全連小三地区対策担当者連絡協議会 10/26(火)

毎年、東海北陸・近畿地区(13府県)の代表者が出席し意見交換を行っている(遠隔での参加)。

①「学校における働き方改革の進捗状況」②「GIGAスクール構想の実現に向けたICT環境整備の進捗状況」という二つのテーマで、各府県の情報交換や意見交換を行った。

(文責:福井市国見小学校長 小林 邦義)

## 調査研究委員会

調査研究委員会では、「新しい時代に必要な資質能力を育成するための教育課程の編成と校長の役割Ⅲ」をテーマに、今日的な学校教育の課題、学校経営上の諸問題や社会の変化に即応した学校の取組について、調査研究を行った。

1 調査対象 全小学校185校[国立1・市町立184]

2 調査期間 令和3年7月2日~7月21日

3 調査項目 全連小調査項目の抜粋と会員からの要望

4 調査内容について(詳細は報告書を参照)

調査の結果、各学校では、新型コロナウイルス感染症の感染拡大という危機的な事態に直面しながらも、児童及び教職員の生命と安全を守ることを第一に考え、校長がリーダーシップを発揮しながら、学校現場が抱える課題解決に必要な組織運営の工夫や実効性の高い取組を進めていることが伺われた。

新たな教育改革・教育施策への対応として、各学校においては、子どもたちにこれからの時代に求められる資質・能力を確実に育むために、これまでの教育実践の蓄積に基づく授業改善を図り、未来の担い手を育てる学校教育の役割を遂行している。特に、令和2年度より完全実施された新学習指導要領による「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改革や「GIGAスクール構想」の実施に伴うICT教育の推進について創意工夫しながら取組を進めていることが分かる。

そのためには、それを推進する教師の資質・能力の向上が大切であるが、大量退職・大量採用に伴う若手教員の増加や、臨時的任用教員の増加により、指導理念や実践的指導力の継承に苦慮している。また、学校を取り巻く環境の複雑化・多様化により、学校に求められる役割は拡大し、新型コロナウイルス感染対策の徹底も加わって、教職員は疲弊している。抜本的な教員定数見直しや研修の充実を進め、「教員の多忙化解消」に対応していくことも大きな課題である。

昨年度からの新型コロナウイルス禍により、学校教育の在り方について見直しが求められた。校長として、これを機に、教職員の働き方についても改善を図り、教職員の働き方改革のために業務の取捨選択を決断し、働きやすい職場にしていくことが大切である。教育課程の編成・実践・改善や教員の資質・能力の向上、子どもと向き合う環境づくりなど、不易ともいべき課題に真摯に向き合うとともに、新型コロナ感染症への対応などこれまで誰も経験したことのない状況における課題にも対峙し、それぞれ適切に対応していくことが必要である。

最後に、アンケートに協力いただいた県下小学校長をはじめ調査研究委員の皆様に、心より感謝を申し上げます。

(文責:福井市一乗小学校長 岩崎 昭彦)

## 教育研究委員会

### 1 活動の報告

第73回福井県小学校長教育研究鯖丹大会に向けて、研究副主題を「夢と希望の実現に向けて主体的・協働的に学び 未来を生き抜く力を育成する学校経営」と設定し、全連小大会・東陸連小大会の13分科会を福井型8分科会に編成した上で、校長の役割や指導等の在り方について実践的な研究を推進した。新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から遠隔による分科会のみで開催となったが、実践内容を県内全小学校で共有することができた。

### 2 主な活動内容

#### (1) 第1回教育研究専門委員会

期日：4月20日(火) 会場：ユー・アイふくい

- 役員選出、年間活動方針、年間行事計画について
- 令和3年度・4年度各研究大会について
- 福井県版「研究の手引き(R4~)」作成について

#### (2) 第2回教育研究専門委員会

期日：6月7日(月) 会場：鯖江東小学校

- 第73回県小学校長教育研究鯖丹大会について  
当日の協力体制確認と会場経路下見
- 東陸・全連小石川大会について

#### (3) 第73回福井県小学校長教育研究鯖丹大会

期日：11月15日(月)~30日(火)

< Teams による分科会ごとの開催 >

[各分科会の発表者]

- ①学校経営 小浜市立今富小 平井 和雄 校長
- ②知性・創造性 大野市下庄小 大石 貴昭 校長
- ③人間性・健康 池田町立池田小 無量小路 宗洋 校長
- ④人材育成 敦賀市立敦賀南小 藤岡 真也 校長
- ⑤危機管理 越前町立織田小 渡辺 徹 校長
- ⑥社会形成能力 坂井市立鳴鹿小 竹内 利道 校長
- ⑦自立と共生 福井市清水南小 吉田 宏樹 校長
- ⑧連携・協働 永平寺町志比南小 竹林 保博 校長

#### (4) 第73回全国連合小学校長会研究協議会石川大会

期日：10月14日(木)15日(金) < 誌上発表 >

豊かな人間性(第5分科会)

池田町立池田小 無量小路 宗洋 校長

#### (5) 福井県版「研究の手引き」改訂およびデータ配信

令和4年度坂井大会より活用

#### (6) 第3回教育研究専門委員会

期日：2月14日(月) 会場：県教育センター

第74回県小学校長教育研究坂井大会について

令和4年度各研究大会について

(文責：鯖江市鯖江東小学校長 西野 義文)

## 編集広報委員会

### 1 活動の基本方針

「会報」を編集・発行し、県小学校長会及び各専門委員会の活動内容を全会員に知らせるとともに、令和3年度の県小学校長会の主な歩みを記録する。また、各界の先輩諸氏の提言などを受けて、校長としての指導力の向上や今日的課題の把握に資するとともに、会員相互の意見交換の場を提供する情報連絡誌としての役も果たすよう努める。

### 2 活動内容

#### (1) 「会報」の編集・発行(A4判、年2回発刊)

##### ①第113号の主な内容

- ・巻頭言、県教育長挨拶、県小学校長会の活動方針、各専門委員会活動計画、校長講話、新任校長の抱負

##### ②第114号の主な内容

- ・巻頭言、校長会に望む(県教育長)、時流潮流、退職校長の言葉、校長講話、各専門委員会活動報告

##### ③委員会の活動内容

##### ○第1回編集広報委員会(4/20 ユー・アイふくい)

正副委員長選出、活動方針確認、年間計画確認

##### ○第1回編集企画会議(8/2 福井市豊小学校)

正副委員長による、第113号の最終校正

##### ○第2回編集広報委員会(8/25 オンライン)

第113号の発行、配付・発送作業、振り返り、第114号の編集計画、各郡市原稿割当確認、全連小関連依頼

##### ○第2回編集企画会議(12/24 福井市豊小学校)

正副委員長による、第114号の最終校正

##### ○第3回編集広報委員会(1/28 オンライン)

第114号の発行、配付・発送の確認、振り返り

#### (2) 全連小広報担当者連絡協議会(7/7 書面承認)

#### (3) 全連小編集「小学校時報」等の原稿依頼、原稿執筆

##### ○「小学校時報」掲載

- ・4月号 福井市東安居小 北 和幸 校長
- ・8月号 大野市有終西小 古川 勝 校長
- ・10月号 坂井市立鳴鹿小 竹内 利道 校長
- ・2月号 おおい町立大島小 新田 美樹 校長

##### ○「教育研究シリーズ第60集」(R4.5月刊行)執筆

福井市東安居小 北 和幸 校長

##### ○全連小HP

「特色ある学校紹介」R3-R4年度掲載校継続  
順化小、成器南小、北瀧小、織田小、岡本小、敦賀西小、おおい町立本郷小

「特色ある研究校便覧」R4-R5年度掲載校決定  
明新小、本荘小、味真野小、美浜西小

#### (4) 福井県小学校長会HP更新(6月、12月、2月)

#### (5) 依頼原稿の調整(随時)

#### (6) その他必要な広報活動

(文責：福井市豊小学校長 福本 ゆうみ)

### 編集後記

「会報」114号発行に当たり、NPO法人今庄旅籠塾 理事長 細川 治 様には、お忙しい中玉稿を賜りました。また、県教育委員会教育長 豊北 欽 様には前号に引き続き校長会への激励の言葉を頂戴することができました。退職校長の言葉や校長講話等、会員の皆様からも経験に基づいた貴重な原稿をお寄せいただき、今号も充実した内容とすることができました。皆様には心より厚くお礼申し上げます。今年度は、昨年度来続くコロナ禍の難局を乗り越えようと、より一層会員相互の共助・協力や団結が強まったように感じます。コロナ収束後も築いてきたネットワークを生かして、会員の皆様がより一層学校運営に力量を発揮されますことを祈念いたします。「会報」やホームページが、その一助となりましたら幸いです。